

「シン・魔の山」について

板見潤一

1 はじめに

書肆華山房の『新魔の山』を手にした。

トーマス・マン『魔の山 (Der Zauberberg)』の「abridged edition (短縮簡略版)」とのことである。

洋書を求める場合、時々見かけるのがこの表記であり、省略無しの全文をきちんと読みたい読者は

「unabridged edition」を選ぶ。一頃から古今東西の書物の電子出版を手掛ける華山房だが、その特色の一つに、長編の作品についてこの短縮版制作がある。漱石の『草枕』が最初の実験ではなかったか。あの有名な冒頭の部分

「智に働けば角が立つ、情に棹させば流される、意地を通せば窮屈だ…」

が丸ごとカットされていた。

漱石が目指した「知・情・意」の統合をサラリとまとめたこの見事な詩句を省くとは！と大いに不満であった。だが、華山房曰く「七面倒な議論の部分をカットすれば、本筋の優雅な流れが浮かんでくる」、確かに、両腕をカットされたヴィーナスが一層の美の化身となる、トルソの美学か。言われれば、文学作品の映画化が概ねその手法を採っている。マンの原文の多くをカット編集して見事な映像作品に仕上げたヴィスコンティ監督の数々の映画が、確かにそのことを語っているのではないか。なるほど映画という手法が新たな二次的創作であるのなら、アブリッジド・エディションにもその役割があるのかもしれない。

要は散髪の腕次第ということになる。幼い頃の妹は「こんな髪にされたァ〜！」と言っては、よく泣いて帰って来たものだ。

2 『魔の山』の原作と翻訳、二次的創作

マンの作品は、高一の国語の授業で『トニオ・クレーゲル』の劇的な朗読に接して以来、色々読んだ。『ヴェニスに死す』の新たな美しさもヴィスコンティの映画化によって知った。

『魔の山』は古本屋で上下巻を見つけ、下宿に籠って読んだ。ハンス・W.ガイセンデルファーの映画版も昔TVで観た記憶(ずっとヴィスコンティ作品だと思っていた)を辿って近年検索するも、アマゾン(Abridged だし)高いのでスイスから半値ほどで取り寄せた。日本語字幕なしのドイツ語版 DVD3 枚セットだが、原作の記憶を超えた味わいは、やはり現地ロケによるものだろう。

さて、華山房の短縮簡略版(¥2,068)を入手したので、比較に原作をと思うも、何処に埋もれているのか発掘不能。全篇読み返すつもりはないのだが、冒頭辺りだけでもチェックしてみたい。参照用に電子版を求めた(華山房版が依拠した佐藤晃一訳を底本とする古典※※文庫版が¥991)。高橋義孝訳の電子版が上下合本版で(短縮版と同じく)¥2,068、何処かに埋もれているのも多分高橋訳であろうから買うのは躊躇、今回はKindleの試し読みに留めておきたい。

ドイツ語原文(¥240)も英訳版#(¥14,61,226)も安価なのでKindleでダウンロード、第一章冒頭部分のみチェックしてみた。

#【英訳の電子本は数種出ているが、見る限り、次のH.T.L.Porterの英訳と同一源。一人の仕事が次々と新たな仕事を産む世の中だ。“The Magic Mountain” translated from the German by H. T. LOWE-PORTER VINTAGE BOOKS - New York Originally issued as Der Zauberberg. Copyright, 1924】

3 巻頭言

原文には第一章の前に「ハンス・カストルプの物語」の巻頭言(Vorsatz,Foreword)が述べられている。

これから物語る序章としての、作者から読者への呼び掛けであり、大変有効で英訳・邦訳諸版にもあるのだが、華山房版(華)が割愛するのはともかくも、「完全版」を標榜する古典※※文庫版(古)がカットするのは如何なものか。丁寧な解説注記もある版なのに残念。

ともかく、どこにでも居る「人好きはするが単純な青年にすぎない」(高橋義孝訳)主人公が、従兄の見舞いがてらに訪れたサナトリウム(結核療養所)で自らも丸ごと取り込まれていくことになる。「物語は過去のことではなければならない」としても、「生活と意識を深刻に分裂させたある転回点・境界線以前に」つま

り、「その勃発と共に非常に多くのことが起り、今以て起ることをほとんどやめていないあの大战前の世界」に、現在我々も居るのではないか。

「その物語が『むかし』のものであればあるほど、一層深く、一層完全で、一層童話めいてくるのではあるまいか。」

「童話」とは、「物語」とは、そういうものである。「時間という不可思議な要素」は、そのような「独特な二重性」を持つからである。

4 第一章冒頭比較

佐藤訳そのものは未見だが（昔読んだ二巻本が高橋義孝訳か佐藤晃一訳か…不明）、それを底本にして注記を施した（古）と、（畢）を比較してみると、前者の訳文の拙劣さが目立つように思う。一方で同じ底本に依拠しているらしい後者は、きちんとした日本語になっている。おそらく他訳も参照しつつ、編集者としての文章校正が働いていると思われる。

例を挙げる：

・Ein einfacher junger Mensch（素朴な若者）

（古）は“einfacher”を辞書の最初の訳語にて「単純な若者」と訳すが、如何なものか。（畢）はこんな修飾語は無視、むしろ日本語として読める文章を心がけていると思われる。世界文学大系に収められている佐藤訳がこんなレベルなのだろうか？高橋義孝訳他も kindle 試し読みで見れば「単純な」！

・Schwäbischen Meer（シュヴェービシ湖）

ドイツ語の Meer はここでは「海」と言うより「湖」、英訳が Lake Constance とするのは正しい。コンスタンツ湖、又はボーデン湖（古、畢）と呼ばれ、因みに、ノイシュヴァンシュタイン城（ヴィスコンティ監督のこれ又傑作『ルートヴィヒ』の居城）への距離は、主人公が目指すグヴォスへのそれとほぼ等距離。

・dahin über Schlünde, die früher für unergründlich galten（かつては底無しと言われた“深淵・沼沢地・溪谷”を越えて）

“Schlünde”は辞書的にはまず「深淵」、英訳では“marsh(沼沢地)”と訳し、（古）は「深淵」、（畢）は「湿地帯」と置いている。（古）と（畢）は同じ佐藤訳に依拠するはずなのに、その差異は興味深い。

（畢）は他版も参照の上の編集者としての筆致だろうが、高橋訳の「淵（ふち）」が妥当と思われる。

5 期待と評価

短縮版（畢）の全体の「散髪技術」については、アマゾンから届いたばかりなので措くとして、ここでは概括のみ述べる。

1) 膨大な分量のダイジェスト

原作に展開されている（と思われる）「感染・浸透する病」「呻吟・彷徨(咆哮)する精神」「浸透・勃発する戦争」、その狭間で翻弄され、然し成長への歩みを捨てない「人間の魂」への希求（これはまさに我々が直面している現代そのものではないか!）、この類い稀な急峻且つ荘嚴な山頂への的確なガイド。道を失いそうな時、退屈で本道を忘れそうな時、登山者を頂上の絶景へ適切に導くガイドの役割がある。畢山房がその的確なガイドたり得ているだろうことを期待したい。

幾つかの忘れ難いシーンを脇の奥に、既に記憶おぼろな、かつて観た山容...、既に老いてハイキング程度しかこなせない嘗ての登山者にも、この一冊が懐かしい再会に導いてくれるかどうか、楽しみにしたいと思っている。

2) タイトルと表紙

『新魔の山』は頂けない。原作知らぬ人は（「旧魔」に対する）「新魔」と誤読するかもしれないからだ。ここは時流に乗ってみせて『シン・魔の山』にしてもよかったか。凡百の二次的創作者らが安直な表紙を作っているとき、畢山房はブリューゲルを持って来た。中々の慧眼と言わねばならない。